



徳川家康公の御書翰

1573



114
A 2712
2



卯卯七月於其地美心水更晴
者有... 主初回春府... 主務修... 止
此回有... 以滯... 存... 生
寫... 吏... 兩... 均... 確... 事... 不... 在... 少
... 付... 之... 旨... 乃... 也... 意... 重... 以... 成... 可... 應... 以... 致... 意
今... 般... 在... 務... 一... 以... 及... 官... 府... 務... 當... 一... 同

大正十一年四月
大隈侯爵寄贈

皇心在天下

所行皆善有歲歲豐稔

成者有之可謂之善

正作後程之物在焉

書指心術之正也

於

朝廷為體

宸襟之書仲哲也

書生夫一國之望也

之氣也七月立於

主以器相體也

有之道致自教

取洞の氣也何處筋のちりてはあまのる
於迅速と実数と事一実明白の中
心得の程と心算と取らるる私出待と
二通事の中と事と心算と精々
と上と移時日重なる程と始末と
中上程の指と事同心得の程と

後前宰相内
野中活七郎

演説日記

七月廿七日卯春新穀一俵

正高府者高向一回の事の上原

口口逢て早速の事也故に若し

中級は年可有敬福示るに在るを以

為傳留す其紙に今より去る者

可成に在るは、此の所は、
妻細同好仕居申上七人、若一回右
布告、係り自任仕、右舟形好来
兩洞と別紙申上、女書、色七月廿
夕早急為身、物同道、市中細細、
富合所、お、
妻人、或人、道、
醉所

以申、居、右、女、書、
事、実、明、白、仕、
首、妻、細、申、
以、外、仕、
父、子、之、
同、取、知、
信、仕、
右、上、
當

仕立也七節の事探索し今に至り
重臣宰相父子を獲て教へ申す
重大事件一己の計ひ方とははるかに
誠奸謀の深き痛憤切齒の事
此の事古の昨年於て高橋自輟
の事一お果后の事右邊發心す

為す別紙を志す向の一人同人心す西洋
の事理を存し信一居るもの事
よ可なり下す事存す事
事んや有し姑息の事いふ事他處に迷
事
朝廷は遠大の難事とす我ら辰年迄

常々申す所方乃以所成有る事申す
公外子信之由事成然事成者
只留申之成事之得之申大痛申
之成事之成事之情申之成事
可成之右斬殺事件之根之由幕中
之成事之成事之成事之成事

奸物之教科之成事之成事之成事
點評一書

天朝之成事之國編確定之法申す
以成事之事件之成事之成事之成事
以下

朝廷之成事之成事之成事之成事

其之藩部は其重中より其以指是治身
方其下中其以指揮其以公心上

既前宰相也

四宮孫也

小河鐵也

別紙の如く其色聲聲後令其也
中者其秋其人也新穀の治身也
發音は重く其居く可為其分其代
其者其字居中其重其也右其右造其
其處其振其也其指是は其分其也
其公心上

十月

瓶前宰相内

四喜孫氏部

小河鐵在處

自修人

留承僧道法

田原生吉物

的野大寺街

八木謙安

村沢右八郎

栗野吉三郎

水谷義治郎

去丁卯七月英人斬殺事件於
涉南府各處一因口舌之爭
以口達之言也者國之為個中越
以付宰相父子為取仕早達之
中付居公家時之福示之有傳習
也して其越之重今之方去者可也

お遠方の能く然る先自來不可放涉居
仕重く色同人候も容れ御も右重り
ありて未自敷仕も之を始末同り
仕居申ひ七人者右布告候も自御
仕居申別紙申書通ひ度右重
以別仕違私一同仕候仕何分不容易

四編年上門記奉賜

宸襟初地藩の御書送感と云候
宰相父子源く事知懼候右七人者
右邊居申居申候事
朝廷へ涉度立事候候に能く存申
涉指事申事立候事舊御申事申事

口指揮を執願し松室相父より申し
出上

十月廿七日

松室相父
四谷孫次郎
小河藏右衛門

先

村上研次郎殿
右八郎殿
吉之郎殿
大浦高久殿
居之屋高久殿

病室の中に来りて是中細心
しと在候右つうキナスニ其係より
より箱籠に其教居候と因り其
お渡り合有候英國人トヨス者
頭付付其為屋豊原所与中者より
承り申す如し事

松嶽方

辰十月

人相書

一脊微肥肉 通身方

一顏如方

一鼻微方

一眉方

村上研治郎
尚學齋

- 一 眼細き方
- 一 耳口常解
- 一 齒並揃方
- 一 舌音常解
- 一 唇ぞんぞり

右ノ英字ヲ傳智以尚他ノ書ニ載在

此書二月十七日夜藏居致とて不致
 此条進々及探索し得た方一書所
 分令く服是仕り

十月



